

論文——シンポジウム「南方熊楠から見たヴィクトリア朝」

南方熊楠と H. G. ウェルズ ——19世紀末の「科学」をめぐる試論¹

小澤 央

1 はじめに

博物学者の南方熊楠(1867-1941)と英国の作家 H. G. ウェルズ(Herbert George Wells, 1866-1946)は同じ時代を生きていた。二人の知識人はともにキャリアの基礎を「科学」に置いていたが、その関心は自然科学から人文科学まで非常に多岐にわたる。両者に直接の交流はなかったが、彼らの活動が地理的に交錯していた時期がある。熊楠がロンドンに滞在し『ネイチャー』(*Nature*)に論文を次々と投稿していた時期(1892-1900)は、ウェルズが科学ジャーナリズムや「科学ロマンス」の書き手として名を上げていった時期と重なるのだ。本論ではこの二人の同時代性に注目したい。19世紀末英国の科学をめぐる諸問題、すなわち科学の制度化、心霊研究、東洋と西洋の相違などの観点から、熊楠とウェルズの初期活動を中心に評価し、二人の思想や科学観、その関係性に迫るのが目的である。²

2 19世紀後半の「科学」——二人が生まれた知的背景

熊楠とウェルズは、それぞれ科学とどのように出会い、科学によって身を立てようとしたのか。世紀転換期までの彼らの初期活動を、当時の英国における科学の状況を考慮に入れて概観してみたい。

よく知られるように、幼少期から10代前半の南方熊楠は、寺島良安編集の百科事典『和漢三才図会』(1712)などを通して、東アジアの博物学から多くを学んだ。中学時代には西洋科学と接し、その自作の教科書にはす

でに生物学者 T. H. ハックスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-1895) の影響が見られる (松居『複眼』84 参照)。予備門時代には生物進化論と出会い、のちに土宜法龍 (1854-1923) への書簡 (1893 年 12 月 21 日付) の中で、「小生考には、科学の原則はわずかに三十年前後ダーウィンが自然淘汰の実証を挙げ、それよりスペンセル輩が天地間の事物ことごとく輪廻に従って変化消長することを述べたるにより、大いに定まれるなりと存じ候」と振り返っている (飯倉 57-58)。苦手科目などが原因で予備門を中退し、1887 年に渡米してからは、植物採集のかたわら、『フンボルト叢書』(*The Humboldt Library*) や『ポピュラー・サイエンス・マンズリー』(*Popular Science Monthly*) を読み漁った。彼が特に興味を引かれたのは、後者に掲載された、進化論の支持とキリスト教の信仰の対立を象徴する、ハックスリーと元首相で国教徒のウィリアム・グラッドストーン (William Ewart Gladstone, 1809-1898) の論争であった。進化論とキリスト教との葛藤は当時の科学者にしばしば見られたもので、たとえば博物学者のアフレッド・ラッセル・ウォレス (Alfred Russel Wallace, 1823-1913) は、人間の精神的発達は自然淘汰の結果ではないと主張することで、両者の折り合いをつけようとした。熊楠はのちにこれを厳しく批判し、法龍への書簡 (1904 年 1 月 4 日付) の中で、「ワリスは有名なる科学者にして、ダーウィンと同時に自然淘汰説を言い出せし人ながら、年もより死も近いから、[……] 科学ばかりでは安心ができぬからというて大乘仏法などは知らず、[……] 相変わらず生れ生国の耶蘇説で、かかる説を出だすなり」と書いている (飯倉 379)。キリスト者ではなかった熊楠は、こういう論争や葛藤を、興味を持ちつつも距離を置いて眺めていたようだ。やがて彼は、仏教的背景を持った自身の、キリスト者とは違った進化論、世界観を構築しようと模索する。1888 年以降、熊楠は『社会学原理』(*Principles of Sociology*, 1883-1896) などのハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の著作を耽読し、社会進化論を含めて人類学的、社会的な問題意識や文化相対主義的な見方に魅了された。³ 1892 年に渡英、1895 年からは大英博物館に通い詰め、古今東西の書物を『ロンドン抜書』としてまとめながら、帰国までに『ネイチャー』に 38 編、『ノーツ・アンド・クエリーズ』(*Notes and Queries*) に 7 編の論文を発表したのである。

一方、H. G. ウェルズはどうであったか。対照的に裕福ではない家庭に育ったウェルズは、しかし熊楠と同様、14歳の頃には独学の姿勢を身につけていた。16歳で早くもスペンサーの『第一原理』(*First Principles*, 1860)に夢中になり(West 40, 44)、その後もこの「ユーモアはないが高貴で実に素晴らしい思想家」⁴について何度も書簡で触れている。1884年に科学師範学校に入学、ダーウィニズムと運命的な出会いを果たす。自伝の中で回想するように、「ハックスリーの(初歩生物学、動物学の)クラスで過ごした一年は、私の生涯において最も教育的な一年であった」(*Experiment*, 201)。ハックスリーによるダーウィニズムの擁護、不可知論の主張、進歩を必然とは見なさない『進化と倫理』(*Evolution and Ethics*, 1893)などの著作は、「ウェルズの育った福音主義的信仰と彼が吸収した科学的観念の間の架け橋」となったのである(マッケンジー106)。熊楠が遠目に見ていたキリスト教と進化論との葛藤は、ウェルズにとっては当事者としてのものだった。進化論のテーマはこうしてウェルズの生涯を貫く課題となる。成績不良で師範学校を中退してから、教師として働きつつ学位試験に合格、やがて科学知識を活かした科学エッセイ、何より彼の言う「科学ロマンス」を発表し、作家としての成功を収めた。彼の作品は、読み書き能力を身につけ科学技術教育を受けた(たとえば1882年から王立科学技術学院は労働者階級向けの教育を行っている)新しい読者層の心をしっかり掴んだのである(宗6-7参照)。

熊楠とウェルズに共通するのは、科学を学ぶ際の独学の傾向、ダーウィニズムを思想的な中核に据えるところである。ともに進化という概念に惹かれ、自身の発想でそれを解釈し再構築しようとした。彼らはおそらく実際に会ったことはなかったが、互いの名を知っていたようである。⁵少なくとも熊楠は、1918年に『人類学雑誌』(33巻2号)に発表した論文「肉吸いという鬼」(紀州田辺の男が会ったという妖怪について論じたもの)の中で、ウェルズの『宇宙戦争』(*The War of the Worlds*, 1898)に言及している。

熊楠かつて二十年前出たウェルズか誰かの小説に、火星世界の住人、この地球へ来たり乱暴する体を述べて、その人支体に章魚の吸盤ごとき器を具し、地上の人畜に触れてたちまちその体の要分を吸い奪い、何とも手に合わぬ

はずのところ、かの世界に絶えてなくてこの世界にあり余ったバクテリアが、かの妖人を犯して苦もなく仆しおわる、とあったと記憶する[……。]。
(『全集2』363-64)

ウエルズの『宇宙戦争』は、当時の科学知識に基づいて書かれたもので(1878年に火星が地球に接近して以来、天文学者たちは火星について多くの報告や議論を行い、ウエルズも論文「火星の知性」[“Intelligence on Mars,” 1896⁶]を著した)、プロットも進化論と関係深く、熊楠の興味を引くものだったかもしれない。⁷ 一方でウエルズも『ネイチャー』によく顔を出す熊楠のことを知っていた可能性がある。1890年代にウエルズは同誌に5編の論文を発表しており(彼の作品に対する書評もほぼ同数ある)、⁸ 二人の論文が同時に掲載されたこともあるのだ(図1参照)。

CONTENTS.	PAGE
A Standard Treatise on Chemistry. By M. M. Pattison Muir	193
Man—the Primeval Savage. By Prof. W. Boyd Dawkins, F.R.S.	194
The Sequence of Studies. By H. G. Wells	195
Our Book Shelf:—	
Conway: "Climbing and Exploration in the Karakoram-Himalayas"	196
"The Royal Natural History"	197
Munro: "Kitchen Boiler Explosions"	197
Gordon: "The Island of Madeira, for the Invalid and Naturalist"	197
Letters to the Editor:—	
"Acquired Characters."—Right Hon. Sir Edw. Fry, F.R.S.	197
The Alleged Absoluteness of Motions of Rotation.—	
A. E. H. Love, F.R.S.	198
The Antiquity of the "Finger-Print" Method.—	
Kumagusu Minakata	199
Peculiarities of Psychical Research.— Edward T. Dixon; Prof. Karl Pearson	
200	
The Artificial Spectrum Top.— Charles E. Benham; Prof. G. D. Liveing, F.R.S.	
200	
"Solute."— F. G. Donnan	
200	
"The Elements of Quaternions."— Lieut. Colonel H. W. L. Hime	
201	
The Lick Observatory. (<i>Illustrated.</i>) By A. Fowler	201
Studies of a Growing Atoll. By Dr. Hugh Robert Mill	203
Notes. (<i>Illustrated</i>)	205
Our Astronomical Column:—	
Advances in Lunar Photography	207
Cometary Ephemerides	207
Russian Astronomical Observations	207
On a Remarkable Earthquake Disturbance observed at Strassburg, Nicolaiew, and Birmingham, on June 3, 1893. (<i>Illustrated.</i>) By C. Davison; Dr. E. von Rebeur Paschwitz	
208	
Explosions in Mines	211
The Possibilities of Long-Range Weather Forecasts. By Prof. Cleveland Abbe	212
Scientific Serial	213
Societies and Academies	214
Diary of Societies	216

図1 『ネイチャー』51巻1313号(1894)、216頁より「目次」。ウェルズの論文が195頁、熊楠の論文が199頁に見える。

「科学」に関する二人の活動について、ある疑問が湧くかもしれない。職業科学者、大学人ではない彼らがどうして科学の分野で活躍できたのか。これは、英国における科学の制度化の問題と関連している。19世紀ヨーロッパの自然科学では、物理学、化学、生物学、地質学といった自律的学問が発展していった。専門学会が相次いで設立され、科学の専門分化の傾向が強まったのである。しかし19世紀中頃までに独仏で国家主導のもと科学が学校や大学で教えられ、作業場や工場にまで普及したのに対し、英国は科学の制度化という点で遅れをとっていた。英国における科学の担い手は依然として非公式集団、アマチュア知識人であり、技術とも緩やかに結びつくにすぎなかったのだ。⁹ 英国政府が科学の支援に本腰を入れるのは1870年代以降であり、¹⁰ オックスブリッジで科学全般の専門教育が本格的に行われるのは世紀転換期のことだった(古川155参照)。産業革命発祥の地である英国が、科学の制度化という点では、近代化=西洋化を始めたばかりの日本とそれほど変わらなかったというのは、この時期の両国の科学者を考えるうえで重要な要素だろう。

同様の状況は、科学雑誌として名高い『ネイチャー』にも反映されている。1869年に創刊された『ネイチャー』は、科学を教養として捉える新興のミドルクラスを読者層として意識する啓蒙雑誌の側面と、最先端の科学を論じる学術雑誌の側面を併せ持っていた。専門家のみならずアマチュア知識人も投稿することが可能であり、創刊者のノーマン・ロッキヤー(Norman Lockyer, 1836-1920)自身も創刊時にはアマチュア天文学者であった(のちに王立科学大学などで教鞭をとり、英国科学振興協会会長も務める)。¹¹

このように完全には制度化されていない科学の状況が、熊楠やウェルズに「科学者」として「科学」の世界に参入することを可能にしたのだ。彼ら自身、組織化されていない科学者の在り方を肯定的に捉えていたふしがある。二人がともに影響を受けたスペンサーは、しばしば「才能あるアマチュア」と呼ばれるように、鉄道技師から独学で学問を身につけ学位とも無縁であった。ダーウィンやウォレスも大学などの研究職には就いていない。熊楠は法龍宛ての書簡(1916年5月8日付)の中で、「小生自由独行の念深く、またことに本邦の官吏とか博士とか学士とかいう名号つけたるものはだ好まず」と告白しているが(飯倉408)、実際彼はその通りの生き方を

したのである。¹² この点に関してウェルズは、『ネイチャー』(50巻1291号、1894)に掲載した論文「科学の大衆化」(“Popularising Science”)の中で、科学が極端に通俗化することと逆に極端に専門化することの双方に反対している。ダーウィンのような過去の偉大な学者たちは、一般読者にも分かる形で執筆し、そうすることで科学者としての責任を果たしてきたが、最近の科学者は専門用語を使うことで一般人に対する責任を放棄しており、科学を一般人からかけ離れたものになっているという(*Wells in Nature*, 21-22参照)。科学者の大衆への責任という点は、ウェルズが『ネイチャー』に発表した13の論文において一貫する問題意識である。彼はこの理念を自身の活動で実践しており、科学や歴史の啓蒙書に加え、膨大なSFを世に送り出すことで、大衆への科学教育を行なったともいえる。熊楠とウェルズが考える「科学」とは、狭い学問の領域を越えて、人間や生物、宇宙の仕組みや働きを理解する試みであり、彼らが理想とする知の在り方とは、百科全書的知性、熊楠の言葉を借りれば「一切智」というべきものだった。¹³

しかし20世紀が進むにつれ日英ともに科学の制度化が深まり、科学者の専門家集団が科学を担う中心的存在となる。その結果、熊楠やウェルズが「科学」において活躍する場は限られてくる。熊楠は、自然科学の専門誌という性格を強める『ネイチャー』から学術総合誌の『ノーツ・アンド・クエリーズ』へと軸足を移した。ウェルズは1943年、人類や生物の歴史や問題を学際的に捉える一連の著作(彼はその試みを「人間生態学」[human ecology]と呼んだ)によりロンドン大学から理学博士号を授与されたが、専門性に欠けるという理由から、英国学士院に推挙される「科学者」には不適格であるとされたのである(マッケンジー627-29参照)。

3 科学と神秘主義

熊楠とウェルズの科学との関わりを考えた場合、現代の視点から意外に思われるもう一つの点は、神秘主義への姿勢かもしれない。二人とも終生、神秘的なものへの関心を失わなかった。そもそも当時の文脈では科学や技術は神秘主義と必ずしも矛盾しなかったのだ。ウクライナに生まれ、アメリカ、イギリス、インドなどを転々とした霊媒師のヘレナ・P・ブラヴァ

ツキー (Helena Petrovna Blavatsky, 1831-1891) は、科学と神学を融合させるものとして神智学を提唱した。『ヴェールをとったイシス』(*Isis Unveiled*, 1877) に始まる一連の著作の中で彼女は、ダーウィニズムから進化の理論を、インド思想から輪廻転生の論理を取り入れ、霊的進化の体系を説明する。1882年にはケンブリッジの倫理学教授ヘンリー・シジウィック (Henry Sidgwick, 1838-1900)、その弟子であり詩人のフレデリック・マイヤーズ (Frederic W. H. Myers, 1843-1901) らが中心となって、心霊現象を科学的、殊に心理学的に調査する組織、心霊研究協会 (The Society for Psychical Research) が設立された。¹⁴ 心霊研究は、数々の元素やX線の発見、熱力学の発展に加え、新しいコミュニケーション技術、すなわち電信、写真、映画、ラジオなどの発明とも関連深かった。¹⁵ たとえばマイヤーズは1882年、遠くにいる相手に感情や思考を伝えるという意味で、遠隔 (tele-) と感情 (pathy) から「テレパシー」(telepathy) という語をつくりだしたが、このテレパシーも、距離や関係性を攪乱させる科学的発見や発明を背景として生まれてきたものだ。

熊楠はアメリカ時代に『ヴェールをとったイシス』を購入したが、当初は神秘主義、心霊研究にそれほど深い関心を抱いていなかった。法龍宛ての書簡 (1893年12月か) で彼は次のように記している。

幽霊等の会[心霊研究協会]のことは、小生一向知らず。[……]またオッカ
ルチズムのことは小生も少々読みしが、名ありて実なき用のことにあらず
や。たとえば霊験とか妙巧とかいうほどのことで、一向その方法等は聞き
申さず。ブラヴァツキ[……]前年読みしも、[……]一向核のなきことなり
し。[……]私はオッカルチズムの書に錢を費やせしが、[……]法方理論も
なんにもなく、はなはだ漠たるものなり。(飯倉21-22)

ここで熊楠は靈魂の存在を否定しているのではない。それに対する研究手法、理論の不在に対して、科学的観点から不満を述べているのだ。帰国後、那智に隠遁し幽体離脱などの神秘体験を得た熊楠は、靈魂についてより関心を深め、マイヤーズの『人格とその死後生存』(*Human Personality and Its Survival of Bodily Death*, 1903) を熟読し、テレパシーにも興味を持ち始めた。やがて熊楠自身、『ノーツ・アンド・クエリーズ』(1911年8月19日号) に、

マイヤーズが紹介する心霊体験に関して「双子とテレパシー」(“Twins and Second Sight”)を發表する。つづけて同誌に、睡眠中に身体から抜け出した魂が誤って違う身体に戻ってしまったという伝説(『和漢三才図会』より)や、死んだ木樵の魂が同名の別の男に入り込んだという逸話(『紀伊続風土記』[1839年完成]より)を取り上げた「入れかわった魂」(“Human Souls Interchanged”)を發表した(1912年11月30日号)。日本語でも「千里眼」(『和歌山新報』、1911年6月10日～18日)「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信」(『人類学雑誌』28卷8号、1912)「通り魔の俗説」(同28卷8号、1912)「睡人および死人の魂入れ替わりし譚」(同30卷1号、1915)「臨死の死人の魂、寺に行く話」(『郷土研究』2卷9号、1915)「魂空中に倒懸すること」(『人類学雑誌』31卷1号、1916)などを次々と著し、神秘的、心霊的テーマを追求してゆく。神秘主義や心霊研究が19世紀末に英国で流行した背景には、科学の物質主義的側面やキリスト教への人々の不満があったが、熊楠も西洋の学問に魅了されつつ、その限界を感じ取っていたのだろう。¹⁶

ウェルズもまた、そのキャリアを通じ、神秘主義に一定以上の関心を維持してきた。1894年には『ネイチャー』(51卷1310号)に、心霊研究協会の主力メンバー、フランク・ポドモア(Frank Podmore, 1856-1910)の著作『亡霊と思考伝達』(*Apparitions and Thought Transference*, 1892)に関する論文「心霊研究の特異性」(“Peculiarities of Psychical Research”)を發表し、激しい論争を呼んだ。ウェルズがこの中で指摘したのは、当時の心霊研究が方法および証拠の点で科学的に不十分なものであるということだ。

[The] advances of [...] all true scientific discoveries, were based upon things that could be perceived directly by themselves, and which could be reproduced whenever required, and completely examined under this condition and that, by those who doubted the facts. [...] But in this ‘psychical research’ the deliberate reproduction of phenomena under conditions that admit of exhaustive sceptical examination appears to be generally impossible, and we are repeatedly asked to form opinions on the hearsay of Mr Podmore and his fellow-investigators. (*Wells in Nature*, 48)

もっともウェルズは、この論文に対するリプライへのリプライ(51卷1316

号、1895)において、「心霊研究の個々の遂行に反対するのではない」と述べており (*Wells in Nature*, 57)、神秘現象そのものや研究それ自体の価値を否定したりはしていない。

むしろウェルズは初期作品で、幽霊、幽体離脱、降霊術、テレパシー、千里眼、透視、奇跡、魔術、悪魔といった、神秘的、心霊的なものを積極的に題材に選んでいるのだ。とりわけ精神、霊魂が肉体から分離するというテーマは多く、「手術を受けて」(“Under the Knife,” 1896——手術中に魂が身体から離れて宇宙空間を浮遊する)、「故エルヴィンシャム氏の物語」(“The Story of the Late Mr. Elvisham,” 1896——老科学者と青年の精神が互いの身体に入れ替わる)、「プラトナーの話」(“The Plattner Story,” 1898——魂が身体から抜け出て四次元を彷徨い、生き霊に出会う)、「盗まれた肉体」(“The Stolen Body,” 1903——自己催眠をかけて魂が身体から離れている間にその身体を悪霊に乗っ取られ、降霊会中の霊媒師に助けてもらう)などがあり、ウェルズが早い段階から精神と物質の関係に強い興味を抱いていたことがよくわかる。心霊体験そのものを主題化していなくとも、神秘的な雰囲気醸し出している作品を挙げれば、「時の探検家たち」(“The Chronic Argonauts,” 1888——妖術師のような時間旅行者が登場する)、その拡大版である『タイムマシン』(*The Time Machine*, 1895——時間旅行者とその友人たちが一堂に会する冒頭の場面が降霊会のように見える¹⁷)などもそうだ。神秘的なテーマは後期になるとあまり前面に出なくなるが、それでも息子のG. P. ウェルズ (George Philip Wells, 1901-1985) やT. H. ハックスリーの孫ジュリアン・ハックスリー (Julian Huxley, 1887-1975) とともに発表した『生命の科学』(*The Science of Life*, 1920-1930) 第8巻第9章には、心霊研究に関する解説に加え降霊会のイラストも引用されている (1411-35参照)。

参考に値するのは、同時代の読者がウェルズの初期作品をどのように受け止めていたかということだ。『タイムマシン』を激賞し作家としての成功に貢献したジャーナリスト兼霊媒師のW. T. ステッド (William Thomas Stead, 1849-1912) は、ウェルズが「心霊現象の記録に含まれた非常に豊かな示唆」を汲み取れる稀有な小説家であると評価し、彼を「心霊ロマンス」の作家として位置づけた (qtd. in Bland 21-22)¹⁸。ウェルズが本当に心霊現象の存在を信じていたかは不明だが、化学的、物理学的な発見やコミュニ

ケーション技術の発明といった、トピカルなテーマを利用してベストセラーを書きたかっただけと片づけてしまうこともできない。彼もまた、靈魂の働きなどを描く「科学ロマンス」を通して、物質と精神の関係に迫りたかったのではないか。

熊楠とウェルズはともに既存の心霊研究に必ずしも満足していなかったが、神秘的なものへの関心と未知への探求をそれぞれ活動の原動力としていた。科学や技術が神秘主義と同列に把握しうる状況、神秘主義が科学の中に組み込まれた状況が、彼らの思想を後押ししたのである。二人とも精神と物質の関係に興味があった。ロンドン時代から一貫して熊楠は、物と心の交わりを「事の学」として追求し、那智時代には仏教思想も取り入れた独自の世界観、「南方マンダラ」へと深化させた。これは科学と宗教を統合する試みでもあり、ハックスリーらの進化論争を知って以来の一つの目標でもあった。これに対しウェルズは、物質と精神の関係を追求するよりもひとまず前提としたうえで、物質条件の改善による精神の改革を訴える方向へと進んだ。世界人権宣言や世界国家の提唱などがそうである。彼の場合も根底には進化論思想があった。しかし彼のキリスト教への態度は複雑で、全能の神や救世主、終末論といったイメージを好んだにもかかわらず、宗教と科学を調和させる境地には至らなかった。¹⁹ このような相違が生まれた背景にはいくつか理由が考えられる。一つには、科学に対する関心の持ちようがそもそも違っていたということ。元来熊楠は生物それ自体に惹かれ、植物採集などのフィールドワークを愛した。ウェルズはむしろ生物学の応用に関心があり、それは自ずと社会改良の願望、優生学的、社会主義的ヴィジョンへと結びついた。もちろん中後期の環境の違いも無視できない。20世紀英国では科学の制度化、合理化が進んだが、そこにとどまったウェルズ(彼自身、合理化の流れに貢献したともいえる)と、そこから遠く離れ熊野の森に籠って思索を深めた熊楠では、思想的に隔たりが出るのもやむをえないかもしれない。

4 東洋と西洋

初期の熊楠とウェルズは科学に対する姿勢で類似性が見られるが、日本

人と英国人というアイデンティティの相違が厳然と存在していたのも事実である。東洋、西洋という立ち位置の違いは二人のキャリアにおいてどのような意味を持っていたのだろうか。

熊楠は「東洋の星座」(“The Constellations of the Far East,” 48巻1249号、1893)以来、ロンドン時代の7年間に38編の論文を『ネイチャー』に発表し、帰国後は1914年までにさらに13編を追加した。これらは比較文化的、民俗学的色彩が強く、西洋近代の科学や技術と同種のもものが東洋にかねてより存在していたことを主張するものや、西洋では知られていない東洋の俗信、伝承を紹介するものが占めている。たとえば「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」(“Early Chinese Observations on Colour Adaptations,” 48巻1250号、1893)は、段成式の『西陽雜俎』(860年頃)を引きながら、「中国人たちは、現代科学の諸分野には無関心なようだが、九世紀という早い時期に、動物の保護色についてのダーウィンの見解をもっていた」と報告し(『英文ネイチャー』44)、「蛙の知性」(“An Intelligence of the Frog,” 50巻1282号、1894)は、ジョージ・ロマネス(George Romanes, 1848-1894)が『動物の知性』(*Animal Intelligence*, 1881)で主張した蛙の地理感覚について、『和漢三才図会』を根拠に、中国や日本では古くから知られていたようだ指摘する。「洞窟に関する中国人の俗信」(“Chinese Beliefs about Caves,” 51巻1307号、1894)「幽霊に関する論理的矛盾」(“Illogicality concerning Ghosts,” 61巻1589号、1900)はともに『社会学原理』に関するもので、前者がスペンサーの見解を中国の記録によって補足するのに対し、後者はスペンサーと同様の見解が中国の王充の『論衡』(90年頃成立)にすでに見られることを紹介している。一連の「拇印考」(最初の論文は「指紋法の古さについて」、“The Antiquity of the ‘Finger-Print’ Method,” 51巻1313号、1894)は、西洋近代の指紋法、拇印制度の導入に関して、同種の技術が日本では署名の代用として伝統的に使われており、それは中国に起源があると主張するものだ。熊楠はこれらの論文執筆のモチベーションに関して、「東洋にも(西人一汎の思うところに反して、近古までは欧州に恥じざる科学が、今日より見れば幼稚未熟ながらも)ありたることを西人に知らしむることに勸めたり」と述べている(「履歴書」『全集7』16)。²⁰

熊楠は東洋、日本、そして和歌山にどのような目を向けていたのか。も

ちろんそれは西洋科学者の眼差しと同じではなかつただろう。松居竜五は、熊楠が20歳頃の早い段階から西洋の学問に触れることで、科学者としての自身のアイデンティティの両義性に気づいていたこと、そしてこの両義性が彼のキャリア形成において重要な役割を果たしていたことを指摘している。²¹

重要なことは、熊楠がみずからの父祖が代々伝えてきた習俗を、スペンサーという近代的な学問の眼を通して見る二重性を、必然的に背負わざるを得なかつたことである。スペンサーを始め、西洋の人類学はアフリカや新大陸における「未開」の人間社会を、自分たちと離れた対象として分析するという側面を強く有してきた。[……]

それに対して、熊楠がみずからの親族のことを「和歌山辺人の或る種族」と呼んでいることは象徴的である。この時、熊楠は、自分は人類学の方に立つ観察者であるとともに、観察される対象でもあるという意識を持っていたはずである。(松居『複眼』200)

一方でウェルズも人類学に強い関心を寄せ、「人間の進化、ある人工的プロセス」(“Human Evolution, An Artificial Process,” 1896)「道徳と文明」(“Morals and Civilization,” 1897)など、²²「未開」社会の習俗に関する人類学を論じるエッセイを書いた。スペンサー、ジェームズ・フレイザー (James George Frazer, 1809-1898) らの人類学への興味、²³ また熊楠ほど顕著でないにせよ、民話やバートン版『アラビアン・ナイト』(1886-1888)の影響もその作品には見られる。²⁴ 英国人であったウェルズはもっぱら人類学の観察者の側に自らを置いていると思われるかもしれないが、実際は、観察者の立場や観察行為そのものを問い直す作品をいくつも残している。初期小説において主人公はしばしば科学者、ジャーナリスト、あるいは探検家といった、観察を生業あるいは趣味とする者に設定されているが、その観察者としての地位は決して安定したものではない。

代表作の一つ、『モロー博士の島』(*The Island of Doctor Moreau*, 1896)では、T. H. ハックスリーのもとで生物学を学んだアマチュア博物学者 (66, 84 参照) のプレディックが、二人の科学者モローとモントゴメリが動物を生体解剖する孤島を訪れる。実は動物である島民たちは、あたかも非西洋の

被植民者のように表象されている（たとえば第6章「邪悪な顔の水夫たち」では、プレディックは彼らを観察し、「褐色の人種」「東洋の女」「黒人の顔」といった言葉で記述する[82参照]）。彼らの社会へと入り込み、観察とともにインタビューを行うプレディックは、フィールドワークを行う人類学者を思わせるが、一方で彼は自分が何者かにつねに観察されているかのような恐怖に捕われる（“The vague dead that had been in my mind since I had seen the inhuman face of the man at the stream grew distincter as I stood there. I began to realise the hardihood of my expedition among these unknown people. [...] Invisible things seemed watching me” [98]）。帰国後、「周囲の人々を見回す」と「不安に駆られる」プレディックは、「好奇の眼差し、質問や援助にひるみ、彼らからかけ離れて独りでいたい」と願うあまり（206）、都会を去って一方的な観察が保証される田舎で化学の実験や天文学の研究に打ち込むことになる。²⁵

二年後に発表した長編『宇宙戦争』では、天文学者を友人に持つ文筆家が、驚くほどジャーナリスティックな精神を発揮し、命の危険を冒してまで（「自衛本能を忘れ」[123]）、地球に襲来してきた火星人の動作をつぶさに観察し（「生き残った人類の中で、私ほどじっくり火星を見た者はいない」[196]）、結論として自説を披露する。しかしながら、そもそも火星人は人類が彼らの存在に気づくよりずっと以前から地球人を一方的に観察してきたのである（“No one would have believed, in the last years of the nineteenth century, that human affairs were being watched keenly and closely by intelligences greater than man’s and yet as mortal as his own” [52]）。火星人という異世界の他者は、この世界の私たちにとって、単なる軍事的脅威のみならず、知性や文明という点で私たちを凌駕する存在であり、バクテリアによって今回の侵略は頓挫したが、再び地球を狙っているのではないか、という主人公の懸念とともに物語は終わる。

おそらく他者から観察される恐怖が最も強調されているのは、短編「ポロ族の呪術師」（“Pollock and the Porroh Man,” 1895）ではないだろうか。アフリカのポロ族の呪術師の恨みを買って、呪いをかけられた探検隊の一員ポロックは、メンディ族の荒くれ者に頼んでその男を殺してもらおう。しかし自分の前に差し出されたその男の首が自分をずっと見ているような気

がしてならない (“I can’t stand that glare,” he said. Then suddenly he rushed at the thing [the head of the Porroh man] and kicked it. It rolled some yards or so, and came to rest in the same position as before, upside down, and looking at him” [184])。英国に戻っても、ポロックは死んだ男の視線から逃れられない。どこにいても何をしていてもふと気がつけば目の前に首がありこちらをじっと観察しているのだ。その恐怖に耐えられない彼はついに自殺する。

ウェルズの初期作品ではこのように、観察する側にいるはずの主人公が、いつの間にか観察される側にいるというパラドクスが繰り返し登場する。観察者の地位の不安定さ、両義性にはさまざまな解釈が可能である。そもそもウェルズその人が、必ずしも同時代の典型的な科学者、観察者ではなかった。労働者階級がしばしば知識人や作家によって、非西洋の被植民者のように観察、表象された時代にあって、²⁶ ローワー・ミドル階級(父は小売店経営、母は家事奉公)に生まれ、奨学金を獲得して科学教育を受け、「科学ロマンス」の書き手となったウェルズは、観察する側と観察される側の双方を内面化していたはずである。スペンサーの社会進化論を読みながら、熊楠とは違った意味でウェルズも自身のアイデンティティの二重性に気づかざるをえず、それを意識しつつ活動していたのではないだろうか。

観察をめぐるウェルズの二面性は、東洋人である熊楠との関係で考えると、また別の意義を帯びてくる。たとえばここに黄禍論のような東洋に対するパラノイア的恐怖を見出すことも可能ではないだろうか。19世紀末には、政治的、軍事的な意味に加え、文化的、学問の意味で東洋人が西洋人にとって脅威となりつつあった。1894年の北里柴三郎のペスト菌発見以降、医学の世界では、東洋人の科学的能力を西洋でも認めざるをえない状況になっていた(Hashimoto xxxiii-xxxiv 参照)。世紀転換期の黄禍論に関する議論で主に念頭に置かれているのは、東洋人が西洋文明を模倣し応用することへの西洋人の懸念であるが、²⁷ それに加えて、東洋人が西洋に匹敵する固有の文明を持っており、それをこれから世界に向けて展開するかもしれないことへの不安もあったのではないか。19世紀末はインド学の黄金時代であった。ジャポニズム(日本趣味)が盛んな時期でもあり、それは美術研究を中心として日本学の基礎となった(小山91-94 参照)。²⁸ 誰より熊

楠自身、東洋人が遥か昔から優れた学問をしてきたことを雄弁にアピールしたのではなかったか。彼はまた、東洋のみならず西洋をも観察、研究対象に据える東洋人学者であった。ウェルズ作品から読み取れる、知らぬうちに知的存在から観察され、ひいては支配されるという恐怖には、台頭する東洋人学者を知的脅威と感じ、西洋人が独占してきた学問領域を東洋人によって侵されることへの恐怖が投影されているのかもしれない。

5 おわりに

南方熊楠、H. G. ウェルズの二人の稀有な思想家が生まれた背景には、科学が完全には制度化されておらずアマチュア知識人が入り込む余地があった状況、科学と神秘主義が矛盾せずに共存しえた状況という、19世紀末英国の「科学」の環境があった。ともに多感な青年であった彼らは、興味の赴くまま知を探求し、自由な発想で世界と向かい合うことができたのである。この姿勢こそ、その後の彼らのキャリアを支える重要な土台となった。二人の活動はまた、彼ら自身の科学者としての特異性、アイデンティティの両義性とも関係が深かった。事情はそれぞれ異なっていたが、科学の観察者であると同時に被観察者でもあるという二重意識を早くから抱いていた彼らは、他の知識人や科学者とは異なり、一種のアウトサイダー的立場から時代を眺め、独自の世界観を構築する手がかりを得ることができたのではないだろうか。

注

- 1 この論文は、日本ヴィクトリア朝文化研究会第17回全国大会(2017年11月18日)、シンポジウム「南方熊楠から見たヴィクトリア朝——科学と神秘主義と文学」における発表「熊楠・科学・神秘主義——イギリス文学を通して考える」の原稿を加筆、修正したものである。
- 2 熊楠とウェルズを同列に把握する発想は、生命誌研究者の中村桂子と社会学者の鶴見和子の対談に見られる。中村は、生命科学を研究し始めてまもなく、科学に基礎を置きながら生物全体を総合的に考えたいと思い、ウェルズの『生命の科学』と平凡社の『南方熊楠全集』を併せ読んだという(中村

- 21, 115-16 参照)。
- 3 熊楠がスペンサー理論を受容しそれに反発する経緯の詳細は、松居『複眼』第5章参照。
 - 4 “To A. M. Davies” (1894) (Smith 213).
 - 5 ウェルズは1888年に大英博物館の近くに住み、同図書室やサウス・ケンジントン博物館図書室に足繁く通っていたが (*Experiment*, 311-17 参照)、熊楠のロンドン滞在時期とはズレている。出版されている熊楠の日記にもウェルズの名は見られない (『日記1』304-86、『日記2』3-169 参照)。
 - 6 *Saturday Review* 81 (4 April 1986): 345-46.
 - 7 もちろん実際に熊楠がこの小説を読んだとは断定できず、別の筋からプロットを知った可能性もある。たとえば『ネイチャー』57巻1476号(1898)には、熊楠の「貝合戦による占いについて」(“On Augury from Combat of Shellfish”)とともにリチャード・グレゴリー (Richard Gregory, 1864-1952) による『宇宙戦争』の書評が掲載されている。
 - 8 『ネイチャー』に掲載されたウェルズの論文は合計13編(科学教育に関するものが多い)、彼の作品に対する書評は合計40編ほどある。
 - 9 以上の説明は、カードウェル 83-84, 135-36 参照。
 - 10 英国政府は1870年に「科学教育・科学振興に関する王立委員会」を設置し、70年代末から教育の拡充を行い、王立協会などの研究機関への資金援助を始めた。1891年には全国の大学の科学教育を促進するための奨学金制度を創設した(古川179 参照)。
 - 11 当時の『ネイチャー』の性格と熊楠の関係については、志村真幸、「南方熊楠と『ネイチャー』誌における天文学——「東洋の星座」投稿をめぐる」、志村編、『異端者たちのイギリス』、487-504 参照。
 - 12 熊楠は「履歴書」(矢吹義夫宛書簡、1925年1月31日付)で次のように述べている。「[菊池]大麓男[爵]の言に、英国人は職業と学問を別にする、医者が哲学を大成したり、弁護士で植物学の大家があったりする、人間生活の安定なくては遠大の学業は成らぬということを知り抜いたからと申されし。[……]いわゆる amateur 素人学問ながら、[……]実は玄人専門の学者を圧するもの多し。スペンセル、クローラ、ダーウイン、いずれもこの素人学問にて千万の玄人に超絶せるものなり」(『全集7』25)。
 - 13 熊楠が『和漢三才図会』や『ブリタニカ百科事典』を好んだのは有名だが、ウェルズも1920年代以降、世界市民のために新たな百科全書をつくるべきだと繰り返し訴えた(講演集『世界の頭脳』[*World Brain*, 1938]などを参照)。
 - 14 科学と神秘主義の密接性を示す他の例として、化学者、物理学者として名高いウィリアム・クルックス (William Crookes, 1832-1919) がいる。彼は1896年に心霊研究協会の会長に就任したが、翌年には英国科学奨励会 (The

- British Association for Advancement of Science)の会長にも就任した(横山462-63参照)。一方、心霊現象を科学的に検証することに価値を見出さない科学者も少なくなく、たとえばT. H. ハックスリーは、降霊会に参加した際に偶然インチキを見てしまい、心霊研究に取り組む同業者に冷ややかであった。友人ダーウィンも懐疑派である(オッペンハイム367-68参照)。
- 15 この点について先行研究は多いが、ウェルズなどのSFとの関係では以下を参照。Keith Williams, “‘Ghosts from the Machine’: Technologisation of the Uncanny in H. G. Wells.” *The Wellsian: The Journal of the H. G. Wells Society* 33 (2010): 20-41.
 - 16 熊楠と神秘主義の関係の全体像については、南方熊楠顕彰館編パンフレット「南方熊楠と神秘主義」(2017)を参照。当初は神智学に否定的だった熊楠だが、帰国後、ブラヴァツキーの『ヴェールをとったイシス』を取り寄せて読んだ。法龍への書簡において彼が描いたユダヤ教(密教)のマンダラの模式図は、ブラヴァツキーが同書で示した、カルデアのユダヤ人による宇宙構造図をもとにしたものである(橋爪453-54参照)。
 - 17 Warner xx-xxi 参照。
 - 18 ウェルズとステッドの関係については以下を参照。Joseph O. Baylen, “W. T. Stead and the Early Career of H. G. Wells, 1895-1911,” *Huntington Library Quarterly* 38.1 (1974): 53-79.
 - 19 「彼自身では教会を拒否したと信じているにもかかわらず、無意識のうちに教会の主張や方法を体現してしまっているということや、生涯をつうじて教会の教えと対抗するような科学の発展につとめ、“公然たる陰謀”という観念によって、教会に拮抗しうるような組織をつくろうと努力してきたことが、わからなかったのである」(マッケンジー631)。
 - 20 熊楠の『ネイチャー』論考は、「西欧近代科学を尊重し、それへの同化を試みつつ、自分の背後にあるアジアの文化的伝統にも深い愛着を抱いていた「一東洋人」が、和漢の文献を英語で物語るアジア語りとして自己形成をしていった、その軌跡」でもある(田村108)。なお、『ノーツ・アンド・クエリーズ』にも合計324編の論文を発表したが、そのほとんどが民俗学的、比較文化的論考である。
 - 21 ここで松居は、『フンボルト叢書』のスペンサー「三つの試論」への熊楠の書き込み、および熊楠自身の論文「小児と魔除」(『東京人類学雑誌』24巻282号、1909)を検討して、論証している(松居『複眼』197-200参照)。
 - 22 それぞれ、*Fortnightly Review*, n.s. 60 (1896): 590-95. *Fortnightly Review*, n.s. 61 (1897): 263-68.
 - 23 たとえばウェルズは『世界史大系』(*The Outline of History*, 1920)の中で、フレイザーの著作を何度か引用している(58-59, 62, 91参照)。

- 24 以下を参照。W. M. S. Russell, “Folktales and H. G. Wells,” *The Wellsian: The Journal of the H. G. Wells Society* 5 (1982): 2-18. Robert G. Hampson, “The Genie and of the Bottle: Conrad, Wells and Joyce,” *The Arabian Nights in English Literature: Studies in the Reception of The Thousand and One Nights into British Culture*, Ed. Peter L. Caracciolo, New York: St. Martin’s, 1988, 218-43.
- 25 観察をめぐるプレンディックの立場の両義性については、Snyder 77-82、宗 84-91 参照。同時期の別の長編『透明人間』(*The Invisible Man*, 1897) では、科学者グリフィンが自らに実験を施し他人から(自分にとって)観察しえない存在となる。彼は一方的に友人や村人を観察し彼らを支配下に置こうとするが、最終的には逆に殺され、その死体は再び可視化するとともに観察の対象となる。
- 26 “The Literature of urban exploration [in the late Victorian era] also emulated the privileged gaze of anthropology in constituting the poor as a race apart, outside the national community. [Henry] Mayhew, for example, introduced his investigation in *London Labour and the London Poor* [1851] by linking the street folks of London to the ethnographic study of ‘wandering tribes in general,’ arguing that, like all nomads, costermongers had big muscles and small brains, and were prone to promiscuous, irreligious, and lazy” (Walkowitz 19). 周知のようにウェルズ自身『タイムマシン』の中で、資本家と労働者が二つの種族、地上人と地底人に進化／退化する遠い未来を描いている。
- 27 ウェルズは「ダイナモの神」(“The Lord of the Dynamos,” 1894)において、非西洋出身の工場労働者が発電機を信仰した挙げ句、英国人の上司を殺し自滅する物語を書いている。ここには東洋人による西洋文明の乗っ取りへの懸念が投影されていると考えることもできる。この短編と黄禍論の関係について、橋本 8 参照。
- 28 英国で大学などにおける本格的な日本研究が行われるのは第二次大戦後のことである(小山 94 参照)。

引用文献

- Bland, D. S. “An Early Estimate of H. G. Wells.” *English Literature in Transition, 1880-1920*. 5.4 (1962): 21-22.
- Hashimoto, Yorimitsu. Introduction. *Yellow Peril, a Collection of Historical Sources, Volume 1: Pearson’s Prediction: Yellow Peril or White Hope?* By Charles Henry Pearson, et al. Tokyo: Edition Synapse, 2012.
- Smith, David C, ed. *The Correspondence of H. G. Wells, Volume I: 1880-1903*. London:

- Pickering & Chatto, 1998.
- Snyder, Carey, J. *British Fiction and Cross-Cultural Encounters: Ethnographic Modernism from Wells to Woolf*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2008.
- Walkowitz, Judith R. *City of Dreadful Delight: Narrative of Sexual Danger in Late-Victorian London*. London: Virago, 1992.
- Warner, Marine. Introduction. *The Time Machine*. By H. G. Wells. Ed. Patrick Parrinder. London: Penguin, 2005.
- Wells, H. G. *Experiment in Autobiography: Discoveries and Conclusions of a Very Ordinary Brain (Since 1866), Volume I*. London: Faber and Faber, 1984.
- . *H. G. Wells in Nature, 1893–1946: A Reception Reader*. Ed. John S. Partington. Frankfurt: Peter Lang, 2008.
- . *The Complete Short Stories of H. G. Wells*. Ed. John Hammond. London: Phoenix, 1998.
- . *The Island of Doctor Moreau: A Critical Text of the 1896 London First Edition, with an Introduction and Appendices*. Ed. Leon Stover. London: McFarland, 1996.
- . *The Outline of History: Being a Plain History of Life and Mankind*. London: Cassell, 1920.
- . *The War of the Worlds: A Critical Text of the 1898 London First Edition, with an Introduction, Illustrations and Appendices*. Ed. Leon Stover. London: McFarland, 2001.
- . Julian Huxley and G. P. Wells. *The Science of Life*. New York: Literary Guild, 1934.
- West, Geoffrey. *H. G. Wells: A Sketch for a Portrait*. London: Gerald Howe, 1930.
- Williams, Keith. “Ghosts from the Machine’: Technologisation of the Uncanny in H. G. Wells.” *The Wellsian: The Journal of the H. G. Wells Society* 33 (2010): 20–41.
- 飯倉照平、長谷川興蔵編、『南方熊楠土宜法龍往復書簡』、八坂書房、1990年
- オッペンハイム、ジャネット、『英国心霊主義の抬頭』、和田芳久訳、工作舎、1992年
- カードウェル、D. S. L.、『科学の社会史——イギリスにおける科学の組織化』、宮下晋吉、和田武編訳、昭和堂、1989年
- 小山騰、『南方熊楠と英国の日本学』、『南方熊楠とアジア』、田村義也他編、勉誠出版、2011年、91–100頁
- 志村真幸編、『異端者たちのイギリス』、共和国、2016年
- 宗洋、『世紀末の長い黄昏——H・G・ウェルズ試論』、春風社、2017年
- 田村義也、「『ネイチャー』誌論考の中のアジア——南方熊楠の最初期英文論考』、『南方熊楠とアジア』、田村他編、勉誠出版、2011年、101–08頁
- 田村義也、松居竜五編、『南方熊楠とアジア』、勉誠出版、2011年

- 中村桂子、鶴見和子、『〈新編〉四十億年の私の「生命」』、藤原書店、2013年
- 橋爪博幸、「H・P・ブラヴァツキーと南方熊楠の宇宙図」、『異端者たちのイギリス』、志村真幸編、共和国、2016年、443-86頁
- 橋本順光、「“Imperial Gothic”としての黄禍論——H. G. Wells, “The Lord of the Dynamos” (1894)を中心に」、*The Victorian Studies Society of Japan Newsletter*、第7号、2008年、8頁
- 古川安、『科学の社会史——ルネサンスから20世紀まで〔増訂版〕』、南窓社、2000年
- マッケンジー、ノーマン、ジーン・マッケンジー、『時の旅人——H・G・ウェルズの生涯』、村松仙太郎訳、早川書房、1978年
- 松居竜五、『南方熊楠——複眼の学問構想』、慶應義塾大学出版会、2016年
- 松居竜五、田村義也編、『南方熊楠大事典』、勉誠出版、2012年
- 南方熊楠、『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』、飯倉照平監修、松居竜五、田村義也、中西須美訳、集英社、2005年
- 、『南方熊楠英文論考〔ノーツアンドクエリーズ〕誌篇』、飯倉照平監修、松居竜吾、田村義也、志村真幸、中西須美、南條竹則、前島志保訳、集英社、2014年
- 、『南方熊楠全集 第二巻 南方閑話・南方随筆他』、岩村忍、入矢義高、岡本清造監修、平凡社、1971年
- 、『南方熊楠全集 第七巻 書簡 I』、岩村忍、入矢義高、岡本清造監修、平凡社、1971年
- 、『南方熊楠日記1』、長谷川興蔵校訂、八坂書房、1987年
- 、『南方熊楠日記2』、長谷川興蔵校訂、八坂書房、1987年
- 南方熊楠顕彰館編、「南方熊楠と神秘主義」、2017年
- 横山茂雄、「マイアーズ」、『南方熊楠大事典』、松居竜五他編、勉誠出版、2012年、458-64頁

——明治大学講師

Summary

Kumagusu Minakata and H. G. Wells: Their Early Work and Science in the Late Nineteenth Century

Hisashi Ozawa

This essay reviews the early work of Kumagusu Minakata (1867–1941; a Japanese naturalist who lived in London in the 1890s and contributed many articles to *Nature*) and his contemporary, H. G. Wells (1866–1946; a British author who rose to fame with his scientific writing in the same decade), by considering the issues and circumstances of science in late nineteenth century Britain.

Minakata and Wells, having studied more by themselves than through higher education, were engaged with science as amateur intellectuals—the former as an independent naturalist and the latter as the writer of science journalism and fiction. What allowed them to enter the sphere of science was the situation in Britain and Japan, in which science was not completely institutionalised or professionalised. The source of their activity was none other than their quest for the unknown, including a link between mind and material. Through his “study of incident” Minakata searched for the interaction of the spiritual with the material, while Wells in many pieces of his science fiction thematised the connection between soul and body. Their interest in spiritual matters was associated with the contemporary situation in which science and technology could be placed on the same level with occultism, as symbolised by psychical research.

In their relationship to science, Minakata and Wells were aware of the ambiguity of their own identities: they were the observer and the observed in science at the same time. As an intellectual from Japan, Minakata through his

writing in English strove to inform the West of Eastern civilisation, whereas in his fiction Wells, who came from the working class, repeatedly questioned the act of observation, subverting the status of the observer. Their unique contributions to science could have also been supported by their perspective as outsiders in the domain of science.

